論　文

恋愛関係における怒りの表出と恋人の反応の関連性
― 対象関係の調整効果の検討 ―

青　山　　巧

I. 問題と目的

1. はじめに

心理臨床の現場において、他者と親密な関係を築けないことで、セラピストのもとを訪ねるクライエントは少なくない。他者との関係を持続させるための一つの要素に、怒りを適切に対処することがあげられる。怒りに任せて表出すれば関係は破壊され、抑制すれば関係は真に親密なものへと発展しない。そのため、怒りを相手が受容しやすいかたちで共有することが、関係構築において重要である。しかし、自己に内在化された対象関係によっては、何度も関係が破壊的になってしまうことがある。そのため、怒りの表出方法だけでなく、個人の心理的要素も考慮する必要がある。そこで本研究では、青年期に経験する親密な関係の一つである恋愛関係に着目し、恋人への怒りの表出と対象関係、恋人の反応の関連について、交際期間を考慮して検討を行う。

青年期はアイデンティティの確立が中心的課題であり、アイデンティティの確立が不十分であると、異性と親密な関係を形成することは困難になる（Erikson, E. H., 1959/2011）。アイデンティティが未確立な状態での恋愛は、恋人からの評価によって自己のアイデンティティを補強しようとする「アイデンティティのための恋愛」（大野, 1995）に陥りやすく、その関係は長続きしないとされてきた。しかし、大学生は親密性の課題への移行期でもあり、近年ではアイデンティティの確立は他者との関係性の観点からとらえ直されている（杉村, 1998）。「アイデンティティのための恋愛」についても、次の発達段階への移行現象と考えられている（大野, 2021）。そして、恋人との良好な関係は、青年の心理的成熟と関連している。恋人からの親密さや愛情、情緒的サポートはアイデンティティの確立と関連し（Berman et al., 2006）、良好な関係の継続がポジティブな結婚観を高める（山内・伊藤, 2008）。そのため、青年期の恋愛関係は不安定になりやすい特徴を有していることを理解した上で、互いにとって良い関係を築いていけるのか取り組んでいくことが重要である。

2. 恋愛関係における怒りについて

怒りは親密な関係で生じやすいとされており（大渕・小倉, 1984）、恋愛関係は異性の友人や片思いの異性との関係よりも怒りを感じることが示されている（立脇, 2007）。そのため、恋愛関係の構築・維持には怒りの問題が重要になる。

怒りは現状を変更したいという願望が背後にある攻撃性を伴った感情であり（大渕, 2015）、怒りの表出には、現状変更という適応的な側面と、攻撃性という破壊的側面を併せ持つ点に注目する必要がある。まず、怒りの表出の破壊的側面として、関係の後退（Baker & McNulty, 2010）、親密さの低下（Tolstedt & Stokes, 1984）、関係満足度の低下（立脇, 2005）との関連が示されている。また、怒りの不適切な表出は、恋愛関係において互いに関係を破壊する行動を喚起しあう破壊的な悪循環を生じさせる場合がある（Liu et al., 2018）。このような相互作用は、関係を破綻させるだけでなく、他者への不信感の増加や自信の喪失と関連することが示唆されている（青山, 2020）。そして極端な場合、DV やストーカー

的行為といった臨床的問題に発展する可能性がある。

一方、怒りの表出の適応的側面として、自身の苦痛を恋人に伝達し、恋人の不適切な行動を抑制することを可能にし（Baker et al., 2014）、交際期間が長くなることが示されている（上原ら, 2019）。問題について恋人と話し合うことはストレスを軽減し（Rusbult et al., 1986）、恋人と怒りの体験を受容的に扱えた者は、恋人以外の他者との関係においても、ポジティブな感情が増加することが示唆されている（青山, 2020）。これらの結果が示すように、怒りの表出はそのあり方によって、関係性を破壊も促進もするという点で、恋愛関係のみならず対人関係全般を考えるうえで重要な要因である。

なお、交際期間によって用いられやすい葛藤の対処行動が異なるということが指摘されている（相馬ら, 2003）。交際期間が短い関係においては、破壊的な対処行動が促進され、反対に、交際期間が長い関係においては、建設的な対処行動が促進されることが示されている（Rusbult, 1983）。そのため、怒りの表出についても交際期間を考慮する必要がある。

怒りの表出方法に関する分類について、各研究者の基準を見ると、個人内での処理や、相手への直接的な表出、第三者への表出、物への八つ当たりなど多岐にわたる（木野, 2000；吉田・高井, 2008）。本研究では、特定の恋人との間で多くなされていた怒りの表出という直接的な行動と恋人の反応の関連を検討する。怒りの表出については、問題解決行動や自己主張的行動などを含めてみていくが、個人内の認知的処理や第三者への表出については除外する。そのため、木野（2000）の分類（「表情・口調」、「遠回し」、「嫌味」、「理性的説得」、「感情的攻撃」、「無視」、「いつもどおり」）を参考にする。ただし、木野（2000）の分類は、同性間での怒りの表出を想定したものであり、恋愛関係における怒りの表出とは若干異なることが予想される。たとえば、怒りを感じたその場で率直に伝える表出の仕方や（青山, 2020）、相手の心情に配慮しつつ問題解決を志向する建設的表出（吉田・高井, 2008）、話し合い（Rusbult et al, 1986）が木野（2000）の分類には含まれていない。そのため、話し合いや率直な表出、建設的表出に関する項目を新たに付け加えることにした。

怒りの表出の効果検証を行う場合、関係満足度や関係重要度などの親しみの指標では、関係に対する全般的な評価となり、解釈が困難になると考えられる。例えば、関係満足度はセックス満足度（高坂・澤村, 2017）や接近・回避コミットメント（古村, 2017）と関連があり、解釈上の制約が伴いやすいという欠点が指摘されている（上原ら, 2019）。そこで本研究では、怒りの表出に対するより具体的な指標として、恋人の反応を取り上げる。

3. 対象関係について

繰り返される外傷的な関係の背後には、その個人に内在化された対象関係の存在が指摘されている（Pine, 1990/2003）。恋愛関係の中では、個人が恋人を自分とは独立した存在として尊重できるか、恋愛関係の中で生じる欲求不満の解消を遅延できるか、そして、恋人に怒りを感じながらも愛情を維持し、思いやりをもって恋人に接することができるかといった対象関係の課題と直結している（Bellak et al., 1973）。また、安定した恋愛関係を築くには、性的領域、対象関係、超自我の成熟が重要という指摘もなされている（Kernberg, 1980/1993）。そこで本研究では、精神分析理論の一つである対象関係に着目する。

対象関係とは「対人場面における個人の態度や行動を規定する、精神内界における自己と対象（他者）との関係性の表象」（井梅ら, 2006）である。そして、個人が抱いている対象関係は現実の対人関係に影響を与えており、心理的成熟の指標としても考えられている。対象関係は乳幼児期から発達が始まるが、取り入れられた対象関係が破壊的、剝奪的、憎しみに満ちているかどうかは、その個人の病理の重さを評価する上で重要な視点となる（Pine, 1990/2003）。特に、恋愛関係においては、恋人を理想化し自分の

願望や欲求を満たしてくれる特別な存在と思い込みやすいため、適切に恋人を捉えるという対象関係の課題はより困難になる。

対象関係の不安定さは対人関係上でのトラブルの多さ（井梅ら, 2015）、避妊を行わない性行為（坂本ら, 2022）との関連が指摘されている。また、山崎・岡本（2015）によると、対象関係が未成熟な者は異性関係において、怒りを恋人にぶつけるのに対し、対象関係が安定した者は恋人と話し合いを通して不安を解消していくということが示された。このように、対象関係は対人関係に関連する重要な概念であり、親密な関係における問題を扱う際に考慮する必要がある。例えば、ある個人が恋人と親密な関係を構築しようと建設的な怒りの表出を試みても、外傷的な関係が繰り返されることがしばしばある。この時、建設的な怒りの表出と恋人の反応の関連性に対して、対象関係の調整効果が影響していると考えられる。対象関係の影響を検討することで、社会的スキルの獲得を支援すべきなのか、あるいは、自己のあり方について見つめ直すよう支援すべきなのかといった、適切な支援の検討を可能にすると考えられる。

Bellak et al.（1973）は、自我機能の一つとして対象関係を位置づけ、主に外的対象との関係のあり方を中心にその評価する点を整理した（神谷・西原, 2006）。Bellak et al.（1973）によると、対象関係の健全度は、①共生―分離―個体化、②一次的自己愛、欲求―充足、対象恒常性、③自己表象と対象表象の安定性、質、分化、④良い対象と悪い対象の分離・融合の度合いによって評価できるとされている。Bell（1995）は Bellak et al.（1973）の査定法に基づいて BORRTI（Bell Object Relations and Reality Testing Inventory）を作成した。井梅（2001）は BORRTI を基礎に DSM- Ⅳの人格障害に関する記述や、日本の臨床知見を参考に青年期用対象関係尺度の作成を試み、井梅ら（2006）で項目と因子構造の再検討が行われた。青年期用対象関係尺度は 5 因子 29 項目（「親和不全」、「希薄な対人関係」、「自己中心的な他者操作」、「一体性の過剰希求」、「見捨てられ不安」）で構成されており、対象関係を分析的・多角的に捉えようとしたものである。本研究では対象関係の評価について、青年の自己理解や心理的援助についての基礎的な知見を得るためにも、青年期用対象関係尺度（井梅ら, 2006）を使用する。

4. 本研究の目的

以上を踏まえ、本研究の目的は、特定の恋愛関係における怒りの表出方法と恋人の反応との関連性について、対象関係の調整効果を考慮して探索的に検討を行うことである。上記の目的のため、まず建設的な怒りの表出方法に関する項目を追加した怒りの表出方法尺度の因子構造を確認するため、探索的因子分析を行う。次に、交際期間の影響を考慮し、恋人の反応を目的変数、怒りの表出方法、対象関係、建設的な怒りの表出方法と対象関係の交互作用項を段階的に説明変数として投入する階層的重回帰分析を行う。これにより、親密な関係の中で繰り返し体験する破壊的な関係について、基礎的知見を得られるため、意義があると考えられる。

II. 方法

1. 調査期間と調査協力者

2021 年 9 月から 12 月にかけてと、2022 年 4 月から 5 月にかけて、近畿圏内にある A 大学に在籍する大学生を対象に調査を実施した。1 回目の募集期間で調査対象者が少なかったため、追加で 2 回目の募集を行った。その際、既に回答したことがある者が再び回答しないよう注意を呼び掛けた。

2. 調査内容

① **フェイスシート**：調査への同意、性別、年齢、恋愛経験の有無について尋ねた。

② **怒りの強さ**：特定の恋愛関係の中でどの程度怒りを感じていたかを測定するため、上原ら（2019）が訳した Batson et al.（2007）の怒り

の形容詞 9 項目を使用した。調査協力者に「あなたは普段その恋人との間で、次のような感情をどの程度感じていましたか」とたずね、6 件法（1 点：全く感じなかった～ 6 点：とても感じた）で評価を求めた。得点が高いほど、恋人に対して怒りを頻繁に感じていたことを示す。

③ **怒りの表出方法**：特定の恋人に対して感じた怒りをどのように表出したのかを測定するため、木野（2000）の怒りの表出方法尺度 19 項目に話し合い、率直な表出、建設的表出に関する独自の項目を 6 項目（「苛立ちを正直に伝える」、「思ったことを率直に伝える」、「怒っていることを素直に伝える」、「怒りを感じた出来事について、恋人の言い分を聞いて話し合う」、「怒りを感じたことについて、恋人と話し合う」、「恋人と話し合って解決しようとする」）を追加し、合計 25 項目を用いた。青山（2020）、吉田・高井（2008）、Rusbults et al.（1986）を参考にした。回答は 4 件法（1 点：全くとらない～ 4 点：非常によくとる）で評価を求めた。得点が高いほど、その表出方法を多用したことを示すようにした。

④ **恋人の受容的反応と拒絶的反応**：特定の恋人が調査協力者の怒り表出に対して、どのように反応したかを測定するために、森脇ら（2002）が作成した自己開示に対する聞き手の受容的・拒絶的反応尺度を使用した。調査協力者の負担を考慮し、各因子の因子寄与率が .60 以上の項目 13 項目ずつを使用し、4 件法（1 点：全くない～ 4 点：よくある）で評価を求めた。

⑤ **対象関係**：対象関係を分析的・多角的に評価するため、青年期用対象関係尺度（井梅ら, 2006）を用いた。本尺度は「親和不全」、「希薄な対人関係」、「自己中心的な他者操作」、「一体性の過剰希求」、「見捨てられ不安」の 5 因子 27 項目で構成されている。回答は 6 件法（1 点：全くそう思わない～ 6 点：とてもそう思う）で評価を求めた。得点が高いほど、対象関係が未成熟であることを示す。

⑥ **アイデンティティと親密性**：Erikson, E. H. のアイデンティティと親密性について測定するため、エリクソンのパーソナリティ要素尺度（以下 EPCS）（藤村, 2009）の「同一性」因子と「親密性」因子を用いた。回答は 5 件法（1 点：全くあてはまらない～ 5 点：非常にあてはまる）で評価を求めた。得点が高いほど、アイデンティティと親密性が確立されていることを示す。

3. 調査手続き

A 大学で開講された講義時間内に調査協力者を募集する用紙を配布し、文章と口頭にて説明を行った。質問紙への回答は、Google forms を用いてオンライン上で回答を求めた。用紙に記載された QR コードを読み込むと、本調査の内容と目的、調査方法、プライバシーの保護、結果の公表について説明する文章が表示され、本調査への協力の意思を選択式で回答を求めた。同意しないと回答した者は、その時点で回答が終了するように設定した。

同意した者全員に対象関係尺度と EPCS への回答を求めた。恋愛経験者には、特定の一人の恋人を想定して回答するように指示し、その恋人との交際状況（現在継続中・解消済み）、交際期間（月単位）について回答を求めた。その後、怒り形容詞尺度への回答を求め、その恋人に対して一度でも怒りを表出したことがあるかどうか回答を求めた。恋人に対して一度でも怒りを表出したと回答した者に対して、怒りの表出方法尺度と聞き手の受容的・拒絶的反応尺度への回答を求めた。

4. 研究倫理

倫理的配慮として、調査協力者を募集する際に、文章と口頭にて①研究目的、②研究方法、③プライバシーの保護、④調査への参加及び同意撤回の自由、⑤予想される身体的、精神的負担もしくは苦痛の有無、⑥成果の公表について説明を行った。なお、本研究は学内の「人を対象とする研究」審査委員会の

承認を受け実施された（承認番号 2021-4 号）。

5. 分析方法

本研究の統計解析には、SPSS Statistics26.0 を用いた。対象関係と怒りの建設的な表出方法およびそれらの交互作用が恋人の反応に及ぼす影響を検討するため、「恋人の受容的反応」と「恋人の拒絶的反応」のそれぞれの得点を目的変数として、対象関係、怒りの表出方法、対象関係と怒りの建設的な表出方法の交互作用項を説明変数にした強制投入法に基づく階層的重回帰分析を行った。step1 では性別、年齢、交際期間、「怒りの強さ」、「同一性」、「親密性」を投入した。性別については女性＝0、男性＝1 としてダミー変数を作成した。step2 では、怒りの表出方法の下位尺度を投入した。step3 では対象関係尺度の下位尺度を投入した。step4 では、建設的な怒りの表出方法と対象関係尺度の交互作用項を投入した。モデル導出に際して、各変数の得点を中心化した後、交互作用項を作成し、多重共線性の問題が生じないように配慮した。

III. 結果

1. 調査協力者

調査協力者 228 名のうち、恋愛経験のある者は 160 名（平均年齢 20.09 歳、標準偏差 1.36、男性 55 名、女性 105 名）であった。そのうち、恋人に対して一度でも怒りを表出した者は 114 名（平均年齢 20.21 歳、標準偏差 1.33、男性 31 名、女性 83 名）であった。怒りを表出しなかった者は 46 名（男性 24 名、女性 22 名）であった。交際中の恋愛関係について回答した者は 93 名（男性 30 名、女性 63 名）、平均交際期間は 13.89 ヵ月（標準偏差 11.94）であった。既に解消された恋愛関係について回答した者は 67 名（男性 25 名、女性 42 名）、平均交際期間は 13.54 ヵ月（標準偏差 12.04）であった。

2. 各尺度の信頼性の検討

「怒りの強さ」、「恋人の受容的反応」、「恋人の拒絶的反応」、対象関係尺度、「同一性」、「親密性」について、それぞれの内的整合性の確認のため、逆転項目の回答を逆転処理した後、Cronbach の α 係数を求めた。順に「怒りの強さ」.96、「恋人の受容的反応」.90、「恋人の拒絶的反応」.89、対象関係尺度で .71—.85、「同一性」.86、「親密性」.76 であった。以上の結果から、内的整合性は許容範囲内であると判断した。それぞれ下位尺度ごとに得点を加算し、項目数で除した値を尺度得点とした。

3. 因子分析

恋人に怒りを表出したと回答した 114 名のデータを使用した。怒りの表出方法尺度の 25 項目のうち、怒りを表出したと判断することが困難であると判断した 3 項目（「気にしない振りをして平然とやり過ごす」「何事もなかったかのうように振る舞う」「いつもと変わらない態度で接する」）を除外し、計 22 項目を用いて探索的因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行った。固有値が 1 以上を参考に、すべての因子に対して因子負荷量が .35 未満の項目、2 つ以上の因子に .35 以上の負荷量を持つ因子を排除して因子分析を繰り返し、解釈可能性を考慮して、最終的に 4 因子 19 項目を採用した（表 1）。

第 1 因子は「相手の言動に対して皮肉を言う」、「相手の非を責め立てる」など、「感情的攻撃」と「嫌味」（木野, 2000）の項目が高く負荷することが示された。恋人を攻撃するような怒りの表出をする項目を含むことから、「攻撃的表出」因子と命名した。第 2 因子は「怒りを感じたことについて、恋人と話し合う」、「相手の言動を冷静に注意する」など、「理性的説得」（木野, 2000）と、新たに追加した話し合いや率直な表出、建設的表出に関する項目が高く負荷することが示された。攻撃的にならないよう配慮しつつ、対話や率直な伝達をめざして怒りを表出する項目を含むことから、「対話志向的表出」因子と命名した。第 3 因子は「表情で怒りを示す」「しぐさで怒りを

表 1　怒りの表出方法尺度の因子パターン行列と因子間相関（最尤法・プロマックス回転）

	F1	F2	F3	F4	*M*	*SD*
F1　攻撃的表出（α = .89）						
相手の言動に対して皮肉を言う	**.93**	-.18	-.17	.24	1.87	1.02
相手の言動に対して嫌味を言う	**.88**	-.05	-.08	.23	1.73	0.97
相手の非を責め立てる	**.81**	-.06	.03	-.09	1.79	0.97
相手の言動の非を指摘する	**.76**	.25	-.14	-.15	1.87	1.01
相手の言動に対して謝罪を求める	**.72**	.18	-.05	-.29	1.36	0.73
激しく相手を非難する	**.63**	-.12	.12	-.20	2.19	1.01
感情的に怒りをぶつける	**.50**	.13	.23	.02	1.59	0.78
F2　対話志向的表出（α = .86）						
怒りを感じたことについて、恋人と話し合う	-.06	**.82**	.06	.02	3.17	0.90
恋人と話し合って解決しようとする	-.15	**.79**	-.17	.11	3.24	0.90
怒りを感じた出来事について、恋人の言い分を聞いて話し合う	.18	**.72**	.06	-.01	3.02	0.99
怒っていることを素直に伝える	-.09	**.71**	-.17	.43	2.74	1.03
思ったことを率直に伝える	.00	**.71**	.03	-.21	3.25	0.91
苛立ちを正直に伝える	.15	**.62**	.27	-.08	2.78	1.01
相手の言動を冷静に注意する	.09	**.40**	.03	.20	2.55	1.00
F3　非言語的表出（α = .74）						
表情で怒りを示す	-.12	.02	**.71**	.03	2.37	1.07
しぐさで怒りを示す	.08	-.03	**.57**	.30	2.33	1.06
口調で怒りを示す	.31	-.04	**.52**	.26	2.15	1.15
F4　婉曲的表出（α = .62）						
自分が怒っていることを遠回しに言う	-.02	-.02	.07	**.54**	2.23	1.15
自分が怒っていることを冗談っぽく言う	-.13	.12	.18	**.36**	1.90	1.05
因子間相関　F1	—	.28	.59	.15		
F2		—	.31	.08		
F3			—	.05		

示す」の「表情・口調」（木野, 2000）の 3 項目からなり、表情やしぐさなどといった非言語的な方法で怒りを表出することから新たに「非言語的表出」因子と命名した。第 4 因子は「自分が怒っていることを遠回しに言う」「自分が怒っていることを冗談っぽく言う」の「遠回し」（木野, 2000）の 2 項目からなり、間接的に言葉で怒りを伝達しようとすることから新たに「婉曲的表出」因子と命名した。因子ごとの α 係数を算出したところ、「攻撃的表出」.89、「対話志向的表出」.86、「態度的表出」.74、「婉曲的表出」.62 であったため、因子ごとに平均を算出し、尺度得点とした。

4. 交際期間における各変数の平均差の検定結果

恋人に怒りを表出したと回答し、かつ、現在交際中の恋愛関係について回答した 77 名（平均年齢 20.38 歳、標準偏差 1.41、男性 19 名、女性 58 名）のデータを用いた。交際期間の影響を考慮するため、平均値（15.61 ヵ月）を境に、15 ヵ月以下を短期群（n = 44）、16 ヵ月以上を長期群（n = 33）とした。まず、交際期間における各変数の平均差を確認するため、交際期間を独立変数、各変数を従属変数に対応のない t 検定を実施した（表 2）。等分散性の検定のために Levene の検定を行ったところ、年齢、「怒りの強さ」、「攻撃的表出」、「見捨てられ不安」、「同一性」、「親密性」で等分散が仮定された（順に F（1, 75）=0.03, p = 85; F（1, 75）= 0.02, p = .006; F（1, 75）= 7.19, p = .009; F（1, 75）= 0.29, p = .59; F（1, 75）= 0.55, p = .46; F（1, 75）= 0.36, p = .55）。t 検定の結果、交際期間によって、「年齢」、「怒りの強さ」、「攻撃的表出」、「見捨てられ不安」、「同一性」、「親密性」で有意な差がみられた。交際期間長期群の方が短期

表2　交際期間における各変数の平均差の検定結果

	短期群（n=44）		長期群（n=33）		t値
	M	SD	M	SD	
年齢	20.09	1.49	20.76	1.20	-2.11 *
怒りの強さ	2.44	1.44	3.26	1.40	-2.50 *
攻撃的表出	1.61	0.63	2.02	0.87	-2.25 *
対話志向的表出	3.01	0.70	3.21	0.65	
非言語的表出	2.27	0.90	2.51	0.97	
婉曲的表出	2.19	0.90	1.86	0.95	
恋人の受容的反応	3.15	0.58	2.91	0.58	
恋人の拒絶的反応	1.36	0.42	1.59	0.62	
自己中心的な他者操作	2.56	1.14	2.90	1.26	
一体性の過剰希求	2.71	0.94	2.48	0.94	
親和不全	3.41	1.14	2.99	1.02	
見捨てられ不安	4.24	1.29	3.42	1.14	2.91 **
希薄な対人関係	2.44	0.83	2.10	0.82	
同一性	2.24	1.01	2.73	1.08	-2.03 *
親密性	3.29	0.82	3.67	0.77	-2.05 *

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

群よりも、「年齢」が高いこと、「怒り」を強く感じること、「攻撃的表出」を多用すること、「同一性」が高いこと、「親密性」が高いことが示された。反対に、短期群の方が長期群よりも見捨てられ不安が高いことが示された。そのほかの変数については、等分散は仮定されず、ウェルチの検定において有意な差はみられなかった。

5. 階層的重回帰分析の実施

怒りの表出方法と恋人の反応との関係を把握し、その関係に及ぼす対象関係の調整効果を検討するため、交際期間ごとに「恋人の受容的反応」を目的変数とする階層的重回帰分析（表3）および「恋人の拒絶的反応」を目的変数とする階層的重回帰分析を行った（表4）。多重共線性の問題に配慮してVIFを算出したところ、長期群のstep4において「自己中心的な他者操作」、「親和不全」、「対話志向的表出と一体性の過剰希求の交互作用項」、「対話志向的表出と親和不全の交互作用項」のVIFが10を超えたため、除外して分析を行った。その結果、VIFは1.03～5.33であり、VIF＞10ならば多重共線性の問題があるとされるため（小塩, 2004）、本研究においては多重共線性の影響はないと考えられる。なお、男女別で分析を行った結果は、性別で分けずに分析した結果とほぼ同じであったため、性別で分けずに分析を行うこととした。

分析の結果、「恋人の受容的反応」では、短期群においてstep3における決定係数の増分（ΔR^2）が有意であった（$\Delta R^2 = .24$, $p = .03$）。step3において、「同一性」（$\beta = -.59$, $p = .02$）、「婉曲的表出」（$\beta = .38$, $p = .02$）、「希薄な対人関係」（$\beta = -.74$, $p = .02$）が有意な偏回帰係数（β）を示した。一方、長期群においては、決定係数、決定係数の増分（ΔR^2）はすべてのstepで有意とならなかった。

「恋人の拒絶的反応」では、短期群において決定係数、決定係数の増分（ΔR^2）はすべてのstepにおいて有意とならなかった。一方、長期群において、step2における決定係数の増分（ΔR^2）が有意であっ

表 3 「恋人の受容的反応」を目的変数とした階層的重回帰分析の結果

投入順序	変数	短期群（n = 44）				長期群（n = 33）			
		step 1	step 2	step 3	step 4	step 1	step 2	step 3	step 4
step1	性別（女性＝0、男性＝1）	.13	.15	-.06	-.05	.23	.31	.29	.24
	年齢	.06	-.11	-.35	-.57	-.10	-.10	-.10	-.20
	交際期間	.01	.07	.20	.26	.00	.01	.05	.23
	怒りの強さ	-.31	-.39	-.29	-.44	-.19	-.08	-.05	-.03
	同一性	-.28	-.36	-.59 *	-.86 **	.02	-.01	-.06	.07
	親密性	.06	.04	.03	.10	.26	.20	.14	.06
step2	攻撃的表出		-.06	-.09	-.15		-.34	-.33	-.25
	対話志向的表出		.36 *	.26	.38		.46 *	.46 *	.33
	非言語的表出		-.07	.01	.12		.03	-.01	-.18
	婉曲的表出		.24	.38 *	.43 *		-.05	-.04	-.05
step3	自己中心的な他者操作			-.24	-.32			-	-
	一体性の過剰希求			.08	.11			.03	.03
	親和不全			.15	.05			-	-
	見捨てられ不安			-.41	-.56			-.10	-.02
	希薄な対人関係			-.70 **	-.73 *			-.06	-.20
step4	対話志向×自己中心的な他者操作				-.25				.32
	対話志向×一体性の過剰希求				-.12				-
	対話志向×親和不全				-.37				-
	対話志向×見捨てられ不安				.49				-.44
	対話志向×希薄な対人関係				.05				.09
	R^2	.14	.28	.53 *	.61	.15	.35	.36	.42
	ΔR^2		.14	.24 *	.08		.20	.01	.06

ΔR^2はR^2の増加量である。

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

表 4 「恋人の拒絶的反応」を目的変数とした階層的重回帰分析の結果

投入順序	変数	短期群（n = 44）				長期群（n = 33）			
		step 1	step 2	step 3	step 4	step 1	step 2	step 3	step 4
step1	性別（女性＝0、男性＝1）	-.03	-.07	-.05	-.07	-.18	-.02	.01	.09
	年齢	-.22	-.22	-.01	.17	.28	.09	.10	.15
	交際期間	-.05	-.09	-.12	-.14	.11	.08	.02	-.10
	怒りの強さ	.33 *	.09	-.04	.10	.28	-.10	-.16	-.17
	同一性	-.11	-.06	-.02	.14	-.26	.01	.08	.02
	親密性	.19	.17	.26	-.01	-.45 *	-.54 **	-.42	-.36
step2	攻撃的表出		.22	.16	.26		.77 **	.80 *	.74 *
	対話志向的表出		-.01	.06	-.21		-.04	-.05	.05
	非言語的表出		.26	.22	.26		-.14	-.10	.05
	婉曲的表出		-.16	-.27	-.25		.10	.07	.09
step3	自己中心的な他者操作			.35	.29			-	-
	一体性の過剰希求			.01	.10			-.01	-.02
	親和不全			.04	.11			-	-
	見捨てられ不安			.19	.04			.20	.16
	希薄な対人関係			.33	.27			.04	.16
step4	対話志向×自己中心的な他者操作				.46 *				-.17
	対話志向×一体性の過剰希求				-.07				-
	対話志向×親和不全				-.12				-
	対話志向×見捨てられ不安				-.03				.33
	対話志向×希薄な対人関係				-.07				-.16
	R^2	.21	.32	.44	.56	.41 *	.63 **	.65 *	.69
	ΔR^2		.11	.13	.12		.22 *	.02	.04

ΔR^2はR^2の増加量である。

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

た（$\Delta R^2 = .22, p = .03$）。step2 において「親密性」（$\beta = -.54, p = .004$）、「攻撃的表出」（$\beta = .77, p = .003$）が有意な偏回帰係数（$\beta$）を示した。

IV. 考察

本研究の目的は、特定の恋愛関係における怒りの表出方法と恋人の反応との関連性について、対象関係の調整効果を考慮して探索的に検討を行うことであった。まず、交際期間による関係性の質的な違いについて述べた後、階層的重回帰分析の結果に基づいて考察を行う。

1. 交際期間による関係性の違いについて

まず、交際期間長期群の方が短期群よりも、年齢が高く、怒りを強く感じ、恋人に「攻撃的表出」を多用し、「見捨てられ不安」が低く、「同一性」と「親密性」が高いことが示された。短期の関係が破綻せず維持された関係のみが、長期的な関係となる。そのため、必然的に交際期間長期群の方が短期群よりも年齢が高くなり、心理的に成熟していると考えられる。また、交際期間が長期の者の方が短期の者よりも怒りを強く感じていたことから、関係が長期化するに従い、恋人に対する期待や欲求が増していき、それらが満たされないことで強い怒りを感じると考えられる。さらに、長期の恋愛関係の方が短期の関係よりも「攻撃的表出」が多用されることを踏まえると、長期の関係では感情的になりやすいため、怒りの適切な対処が必要不可欠であると考えられる。

2. 対象関係の調整効果について

建設的な怒りの表出方法と恋人の反応の関連における、対象関係の調整効果について探索的に検討を行った。階層的重回帰分析の結果、「対話志向的表出」と対象関係尺度の交互作用項を投入した step4 において、決定係数、決定係数の増分は有意とならず、対象関係の調整効果は確認されなかった。一方、交際期間短期群において、「希薄な対人関係」が恋人の受容的反応と負の関連が見られた。これらのことから、交際期間が短い場合、対人関係の希薄さは怒り表出時の恋人の反応に直接関連し、関係の悪化に作用することが示唆された。

3. 交際期間短期群における「恋人の受容的反応」について

まず、交際期間短期群において、「恋人の受容的反応」は「婉曲的表出」と正の関連、「同一性」、「希薄な対人関係」とは負の関連があることが示された。「婉曲的表出」は木野（2000）における「遠回し」によって構成された因子であり、怒りを感じていることを遠回しな表現や冗談を用いて表出するものである。木野（2000）によると、このような表出方法は同性との関係において比較的多用され、対人的評価を損なわずに怒りを伝達することが可能である。さらに、冗談に関していえば、からかいには関係を深める機能がある（遠藤, 2008）。これらのことから、比較的短期の関係においては、婉曲的な怒りの表出を用いることで、ストレスフルな状況を、否定的な要素を減らしつつ、関係を深化させるきっかけに変えることが可能になると考えられる。

対象関係の「希薄な対人関係」は、恋人への怒りの表出時に対人関係が希薄であるほど、恋人の受容的な反応を抑制することが示された。「希薄な対人関係」は、心の頑なさや社会的スキル不足との関連が指摘されている（井梅ら, 2006）。つまり、特に恋愛関係が比較的初期の段階では、恋愛関係に限らず、他者との表層的な関係の構築に必要な社会的スキルがある程度身についているかどうかが、恋人との怒りの表出時の恋人の反応にも影響すると考えられる。

「同一性」については、アイデンティティの確立の程度が低いほど、恋人から受容的な反応を得やすいことが示された。怒りを表出する側のアイデンティティ確立の程度が低いほど、恋人の側に相手の不安定なアイデンティティを補強しようとする受容的な反応が引き出されたと考えられる。しかし、関係が

長期化するにつれて、次第に「呑み込まれる不安」（大野, 1995）が生じ、受容的な反応をしなくなるか、関係が解消されることで、長期群において関連が見られなかったと考えられる。

4. 交際期間長期群における「恋人の拒絶的反応」について

交際期間長期群において、「恋人の拒絶的反応」は「攻撃的表出」と正の関連、「親密性」と負の関連が示された。まず「攻撃的表出」について、恋人を責め立てるように怒りを表出することが多いほど、恋人から拒絶的な反応を得やすいことが示された。これは、Liu et al.（2018）の結果と一致し、攻撃的な怒りの表出は、被表出者の不快感や防衛的態度を誘い、その結果、恋人の拒絶的な反応を引き出しやすくなると考えられる。

「親密性」は、他者との関わりのなかで自己を見失わないでいられる確信や、他者への信頼感のことであり、親密性の課題を達成しているほど、恋人の拒絶的な反応を抑制することが示された。親密性の対となる孤立は、自身にとって脅威となるものを拒絶し破壊しようとする心構えである（Erikson, E. H., 1959/2011）。親密性の課題に問題を抱えていると、怒りの表出という自己開示が必要となる状況において不安が高まり、自身の素直な気持ちに触れることが難しくなり、恋人に対しても打ち明けらずに回避的な態度をとる可能性がある。そのような態度は、恋人に否定的な印象を与えることになり、結果的に拒絶的な反応を得やすくなると考えられる。

5. まとめと今後の課題

本研究の結果から、対話を志向する怒りの表出方法と恋人の反応の関係における対象関係の調整効果は確認されなかったものの、交際期間によって恋愛関係が質的に異なる可能性が示唆された。比較的交際期間が短い関係においては、より表層的な関係を構築する際に求められる社会的スキルに関連する要素がどの程度身についているかが関係の深化に寄与するが、交際期間がより長期の関係においては、それらの要素はあまり作用せず、むしろ、よりパーソナルな心理的成熟の程度が関係の深化に寄与すると考えられる。このことは、個人が抱える関係の期間に応じて、適切な心理支援の選択することに活かすことができるであろう。

以上のことから、交際期間による関係性の質的な違いは、現実的な問題が関係の維持にどの程度関係するのかによって異なると考えられる。短期の恋愛関係においては、実験的な意味合いが強く、表面的に居心地の良い関係を築けるかどうかが重要であり、現実的な問題は関係の維持にそれほど関係しない場合が多い。それに対し、長期の恋愛関係においては、現実的な問題を考慮して二人の関係を維持するかどうかを考えなければならない場合が多い。青年期の場合、恋愛関係が継続する中で、進学や就職に伴って社会的立場が変化することがある。また、共同生活をいつから開始するか、結婚はどうするのかといった経済的、社会的な問題が生じる。関係を長期的に維持するためには、これらの現実的な問題を二人で解決していくことが必要である。そのため、長期的な関係では表面的に良好な関係を維持することが減り、不調和が表面化しやすくなると考えられる。

最後に、本研究における課題を二点述べる。第一に、調査方法に限界がある。本研究は一時点での質問紙調査によるものである。恋人から拒絶的な反応をされたから、建設的な表出方法を試すといった逆方向の因果関係や、循環的な関係も想定されるため、因果関係について検討することは困難である。また、怒り被表出者である恋人について未検討である。本研究では、怒り表出者に恋人の反応について回答を求めたため、表出者自身の認知的な影響を多分に受けていると考えられる。そのため、今後は縦断的な方法やダイアドデータを用いて、実証的に検討する必要がある。第二に、怒りの原因といったその他の要素を考慮しなかったことである。何に怒りを抱くかは個人によって大きく異なる。原因によっては、

怒り被表出者が了解不可能なものも存在するだろう。今後の研究では、怒りの原因についても焦点を当てる必要があるだろう。

引用文献

青山巧（2020）．恋愛関係における怒りを通して生じるパーソナリティの変化―質的統合法を用いて―．京都文教大学臨床心理学部研究報告，**13**, 53-66.

Baker, L. R., & McNulty, J. K.,（2010）. Shyness and marriage: Does shyness shape even established relationships? *Personality and Social Psychological Bulletin*, **36**, 665-676.

Baker, L. R., McNulty, J. K., & Overall, N. C.（2014）. 5 When Negative Emotions Benefit Close Relationships. In Parrott, W. G.（Eds）, *The Positive Side of Negative Emotions*（pp.101-125）. The Guilford Press.

Batson, C. D., Kennedy, C. L, Nord, L. A., Stocks, E. L., Fleming, D. A., Marzette, C. M., Lishner, D. A., Hayes, R. E., Kolchinsky, L. M.,& Zerger, T.（2007）. Anger at unfairness: Is it moral outrage? *European Journal of Social Psychology,* **37**, 1272-1285.

Bell, M. D.（1995）. *Bell Object Relations and Reality Testing Inventory（BORRTI）, manual*. Western Psychological Services.

Bellak, L., Hurvich, M., & Gediman, H.（1973）. *Ego functions in schizophrenics, neurotics and normal, A Systematic Study of Conceptual Diagnostic, and Therapeutic Aspects*. Wiley.

Berman, S. L., Weems, C. F., Rodriguez, E. T., & Zamora, I. J.（2006）. The relation between identity status and romantic attachment style in middle and late adolescence. *Journal of Adolescence,* **29**, 737-748.

遠藤由美（2008）．からかいの主観的理解：役割と他者への一般的態度の影響．関西大学社会学部紀要 , **39**, 1-16.

Erikson, E. H.（1959）. *Identity and the Life Cycle*. International Universities Press.　西平直・中島由恵（訳）（2011）．アイデンティティとライフサイクル．誠信書房.

藤村和久（2009）．エリクソンのパーソナリティ構成要素測定尺度（EPCS）の同質性と信頼性の確証：構造方程式モデリングを用いて．大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要，**8**，211-220.

井梅由美子（2001）．青年期・成人期を対象とした対象関係尺度作成の試み．人間文化論叢，**4**, 311-320.

井梅由美子・平井洋子・青木紀久代・馬場禮子（2006）．日本における青年期用対象関係尺度の開発．パーソナリティ研究，**14**（2）, 181-193.

井梅由美子・藤後悦子・大橋恵（2015）．成人期における対象関係と発達的変化―青年期との比較から―．東京未来大学研究紀要 , **8**, 1-11.

神谷栄治・西原美貴（2006）．心理アセスメントにおける自我機能．椙山女学園大学研究論集人文科学篇 , **37**, 45-54.

Kernberg, O. F.（1980）. *Internal World and External Reality*. Jason Aronson Inc.　山口泰司(監訳)(1993)．内的世界と外的現実（下）．文化書房博文社.

木野和代（2000）．日本人の怒りの表出方法とその対人的影響．心理学研究 , **70**（6）, 494-502.

古村健太郎（2017）．恋愛関係における接近・回避コミットメントと投資モデルの関連．パーソナリティ研究 , **25**（3）, 240-243.

高坂康雅･澤村いのり（2017）．大学生が恋人とセックス（性行為）をする理由とセックス（性行為）満足度・関係満足度との関連．青年心理学研究 , **29**（1）, 29-42.

Liu, J., Lemay, E. P. & Neal, A. M.（2018）. Mutual cyclical anger in romantic relationships: Moderation by agreeableness and commitment. *Journal of Research in Personality, 77*, 1-10.

森脇愛子・坂本真士・丹野義彦（2002）．大学生における自己開示方法および被開示者の反応の尺度作成の試み．性格心理学研究 , **11**（1）, 12-23.

大野久（1995）．青年期の自己意識と生き方．落合良行・楠見孝（編）講座生涯発達心理学 4　自己への問い直し 青年期．金子書房，pp.89-123.

大野久（2021）．「アイデンティティのための恋愛」研究と方法論に関する理論的考察．青年心理学研究 , **33**（1）, 1-20.

大渕憲一（2015）．セレクション心理学 28　紛争と葛藤の心理学―人はなぜ争い，どう和解するのか．サイエンス社.

大渕憲一・小倉左知男（1984）．怒りの経験（1）：Averill の質問紙による成人と大学生の調査概況．犯罪心理学研究 , **22**（1）, 15-35.

小塩真司（2004）. SPSS と Amos による心理・調査データ解析―因子分析・共分散構造分析まで―．東京図書.

Pine, F.（1990）. *Drive, Ego, Object, and Self. A Synthesis for Clinical Work*. Basic Books.　川畑直人（監訳）（2003）．欲動，自我，対象，自己―精神分

析理論の臨床的総合．創元社.

Rusbult, C. E.（1983）. A Longitudinal test of the investment model: The Development（and deterioration）of satisfaction and commitment in heterosexual involvements. *Journal of Personality and Social Psychology,* **45**（1）, 101-117.

Rusbult, C. E., Johnson, D. J. & Morrow, G. D.（1986）. Impact of couple patterns of problem solving on distress and nondistress in dating relationships. *Journal of Personality and Social Psychology,* **50**（4）, 744-753.

坂本保子・藤邉祐子・高橋雪子・前森桃子（2022）．青年期の性行動・性知識に関する実態調査（第二報）―避妊行動と青年期対象関係尺度に焦点を当てて―．八戸学院大学紀要 , **64**, 107-116.

相馬敏彦・山内隆久・浦光博（2003）．恋愛・結婚関係における排他性がそのパートナーとの葛藤時の対処行動選択に与える影響．実験社会心理学研究 , **43**（1）, 75-84.

杉村和美(1998)．青年期におけるアイデンティティの形成：関係性の観点からのとらえ直し．発達心理学研究 , **9**（1）, 45-55.

立脇洋介（2005）．異性交際中の出来事によって生じる否定的感情．社会心理学研究 , **21**（1）, 21-31.

立脇洋介（2007）．異性交際中の感情と相手との関係性．心理学研究，**78**（3）, 244-251.

Tolstedt, B. B., & Stokes, J. P.（1984）. Self-disclosure, intimacy, and the depenetration process. *Journal of Personality and Social Psychology,* **46**（1）, 84-90.

上原俊介・森丈弓・中川知宏（2019）．親密な関係における怒りの感情表出と効果：生存時間分析による検討．実験社会心理学研究，**59**（1）, 25-36.

山内星子・伊藤大幸（2008）．両親の夫婦関係が青年の結婚観に及ぼす影響：青年自身の恋愛関係を媒介変数として．発達心理学研究 , **19**（3）, 94-304.

山崎恵莉菜・岡本祐子（2015）．青年期女性の対象関係とアイデンティティ，および境界例心性との関連．広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要 , **14**, 58-79.

吉田琢哉・高井次郎（2008）．怒り感情の制御に関する調整要因の検討：感情生起対象との関係性に着目して．感情心理学研究 , **15**（2）, 89-106.

Abstract

The Relationship Between the Expression of Anger in Love Relationships and the Response of the Lover: An Examination of Moderator Effects in Object Relationship

Takumi AOYAMA

The purpose of this study was to examine the relationship between the way anger is expressed in a romantic relationship and the partner's reaction, taking into account the adjustment effect of object relations. Expressions of anger can be either destructive or adaptive. Inappropriate displays of anger work to worsen the relationship with the partner. Expressing anger constructively, on the other hand, can work to deepen the relationship with the partner. Dealing with anger in an appropriate manner and sharing it with the partner is important in continuing a romantic relationship. One factor involved in continuing a romantic relationship is the maturation of object relations. Object relations are representations of the relationship between the self and others in the intrapersonal world, and define a person's attitudes and behaviors in interpersonal situations. Internalized object relations can lead to the repeating of destructive relationships. In this study, a questionnaire survey was conducted among college students (N=77, 19 male, 58 female) with experience of being in romantic relationships. Hierarchical multiple regression analysis was conducted using "accepting response by the partner" and "negative response by the partner" as dependent variables, and the method of expressing anger, object relation, the interaction between "dialogue-oriented expression" and object relations as independent variables. In order to take into account the effects of the duration of relationships, analyses were conducted separately for short-term (n=44) and long-term (n=33) relationship duration groups. The results showed that the association between the expression of anger and the partner's reaction varied depending on the duration of the relationship. In the short-term relationship group, with regard to an "accepting response by the partner", the results showed a positive correlation with "euphemistic expressions" and a negative correlation with "identity" and "tenuous interpersonal relationships". In the long-term relationship group, there was a positive correlation with a "negative response by the partner" and a negative correlation with "intimacy". Based on these results, it can be deemed that in short-term relationships, the acquisition of social skills has a positive effect, while in long-term relationships, there is no significant effect. We can also conclude that in long-term relationships, the personality of the individual is a factor that affects the relationship.

Key words : Romantic love, Anger expression, Object relation